

学校体験と定年後の生きがい(その1)

——大企業ホワイトカラーの場合——

○新井郁男(東京工業大学)河野重男(お茶の水女子大学)渡辺博史(流通経済大学)牧昌見(国立教育研究所)岩崎三郎(青山学院大学)大波昇一(高根大学)新井真人(秋田大学)小島秀夫(茨城大学)樋口一辰(東京工業大学)濱名陽子(東京工業大学)秋永雄一(東京大学大学院)

はじめに

本発表は「高齢化社会と教育」研究会(代表新井郁男)がI及びIIで述べるような研究の第一段階として、二十一世紀文化学術財団の助成を受け、昭和57年度から2ヶ年プロジェクトとして行った大手M社定年退職者を対象とする「高齢化社会における生きがいと教育に関する調査」(以下「大手M社調査」と略称する。)の中間的発表である。

I 研究の目的と研究枠組

1. 目的

本研究は、人間として成熟段階に達した人た、特に退職後の人た(企業人、教師などの専門職、その他さまざまなカテゴリーを含める)を対象にして、学習活動や地域への参加活動の実態、「生きがい」感、及び子ども時代から退職までの具体的な家庭、学校、地域、職場における教育・学習体験(形式的な学歴ではなく教師・友人・先輩などとの出会い、教科外活動、それとかわる知的啓発などを含める)を調査し、退職後の生き方と退職までの教育的体験の間にどのような関連があるのか(どのような体験が退職後の生きがいにつながる学習を支え、逆にどのような体験がそれを阻害しているのかといったこと)を分析・考察することによって、中・高年期における生きがいの観点に立った生涯教育のあり方についての具体的に現実的な展望を切り開くための手がかりを探ることとを目的とする。

2. 研究枠組

これまでに内外で行われた主な研究との関係において本研究の枠組の特色を整理すると以下のようになる。

Cumming-Henry ⁽¹⁾	退職後は社会からの離脱が退職者の心理的適応を促す。(離脱理論)
Tobin et al ⁽²⁾	総体としての活動量が適応を促す。(活動理論)
定年制問題研究会	職業階層 → 活動の717 → 適応
「高齢化社会と教育」研究会	学校時代の → 定年前の → 定年後の → 生きがい 活動の717 活動の717 活動の717

(1) Cumming E. and W. Henry, 1961
Growing Old: The Procece of Disengagement.
Basic Books

(2) Tobin, S. S. et al 1962
"An empirical investigation of the disengagement theory" Journal of Gerontology, 17: 475-

II 大手M社調査の対象・手続・方法

1. 対象

昭和57年現在の大手M社男子定年退職者

2. 調査手続・方法

昭和57年5月より先行研究の検討を行い、同年11月調査票案作成。それについて大手M社等から紹介された大手M社定年退職者5人にインタビューをしてコメントをもらい、それに基づいて修正した調査票の一部を、分量の関係で2つに分け(A票とB票)無作為抽出による50人(A票、B票各25人)に予備調査を57年12月に実施した。その回収状況は以下のとおり。

調査票	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	計
A票	2	3	1	0	1	2	2	2	1	1	15
B票	1	2	2	1	2	1	1	2	0	1	13
計	3	5	3	1	3	3	3	4	1	2	28

本調査は、郵送法により、大手M社からの調査協力依頼状を入れ、58年3月15日実施した。発送総数1929、回収総数1352(うち第一次締切4月15日までに1133、第二次締切5月10日までに219)回収率70.1%であった。未回収の内訳は外地出張11、病氣15、棄権4、転居先不明15、その他52/であった。自由記

述形式を多くとり入れたところ、大変詳しい記述が多かった。特別に原稿用紙数枚に自分の過去の体験を綴ってくれた人もいたし、電話や手紙で、もっと詳しいインタビューに応じますという申し出もあった。(拒否反応も若干はあったが。)

(以上新研究)

Ⅲ 大手M社調査の結果についての中間的考察

1. 社会意識

社会意識として特に価値観、満足度、階層帰属意識についてとりあげる。

(1) 価値観

調査対象者の価値観を明らかにするために、14の質問項目に対し、それぞれ「全くそう思う」から「全くそう思わない」の5段階で回答してもらった。これらの質問項目は先行研究を検討することによって作られたものであるが、その結果は次のようなものであった。()内は「全くそう思う」と「そう思う」の合計。

表1

1. 先祖の墓は永く守っていたい	89.8%
2. 子供が一人もいなかったら、家が空っぽになるのが嫌	32.2
3. 多くの人から慕われるようなことを進んでやりたい	81.1
4. 人の上に立つものには思いやりが必要だ	95.3
5. 結婚相手は家柄も考えて決めるべきだ	62.2
6. 出世や昇進がかかっているなら、多少のことはたえしのんで来た	37.6
7. 町内の行事や活動にはあまり関係したくない	26.2
8. 隣り近所とのつきあいは特にしたくない	12.7
9. 世の中で自分のやれることは限りがあるので人に頼る以外にない	25.8
10. 職場においてもお互いの立場を尊重していくことが重要である	95.5
11. 多くの人から孤立してでも自分の正しいと思う考えを主張したい	65.7
12. 仕事のことでも自分が正しいと思えばそれが受け入れられるまで主張してきた	65.6
13. いろいろなタイプの人とつきあっています	71.7
14. できるだけ多くの趣味仲間と知り合いたい	66.0

以上の結果をさらに因子分析にかけ、どういった価値観のパターンがみられるかを明らかにした。その結果、価値観の類型としては次の5つがあることが明らかにされた。

第1因子：「町内の行事や活動にはあまり関係したくない」・「隣り近所とのつきあいは特にしたくない」といった近所づきあいに関する因子。

第2因子：「いろいろなタイプの人とつき

あいたい」・「できるだけ多くの趣味仲間と知りあいたい」といった社交性に関する因子。

第3因子：「多くの人から孤立してでも自分の正しいと思う考えを主張したい」といったものに代表されるような、自己主張についての因子。

第4因子：「多くの人から喜ばれるようなことを進んでやりたい」といった質問項目に代表されるような、思いやりに関する因子。

第5因子：「結婚相手は家柄も考えて決めるべきだ」という質問項目に代表されるような権威に関する因子。

各因子に対するネーミングは今後修正される必要があるかもしれないが、それぞれの因子と他の社会意識との関連については目下検討中である。

(2) 満足度

満足度を明らかにするために、現在の住まい、妻との関係、友人とのつきあいなど9項目について、「非常に満足」から「非常に不満」の5段階のうち1つを選択してもらった。「非常に満足」と「やや満足」を合計したものを満足度とみると、その結果は次のようになっている。

表2

1. あなたの現在の住まい	82.9%
2. ご家族の経済的くらしむき	73.9
3. 妻との関係	87.5
4. 妻以外の家族との関係	75.5
5. 友人とのつきあい	75.3
6. 近隣とのかかわり	27.5
7. 現在の仕事	53.9
8. 自由にできる時間	69.7
9. 余暇活動	54.1

満足度について注目されることは、近隣とのかかわり、現在の仕事、余暇活動については満足度が比較的低いことである。

こうした満足度について因子分析を行なうと、次のような3つの因子があることが明らかにされた。

第1因子：「妻との関係」「友人とのつきあい」「近隣とのかかわり」といった項目に

代表される、人間関係に関する因子。

第2因子：「自由にできる時間」「余暇活動」といった、余暇に関する因子。

第3因子：「現在の住まい」「経済的くらしむき」といった生活水準に関する意識。

(3)階層帰属意識

階層帰属意識については、「今、かりに日本の国民を9つの階層に分けるとすれば、あなたはどこに入るとお考えですか」と質問し、「上の上」から「下の下」までの9段階から1つを選択してもらった。その結果を他の類似の調査結果と比較してみると次のようである。

	上	中	下	DK・NA
生きがいと教育調査 (S.58)	18.2%	76.9	4.2	0.6
国民生活選好度調査 (S.56)	5.0%	79.2	11.1	4.7
S.S.M調査 (S.50)	1.2%	76.4	20.6	1.8

それぞれの調査は、帰属階層の正分方法が異なるため、比較可能にするために、上・中・下にまとめた。その結果、われわれの今回の調査では、階層帰属意識について自己を「上」に属すると判定している人の比率が18.2%ということに注目して置るであろう。これに対して「下」と判定している人の比率が、4.2%である。

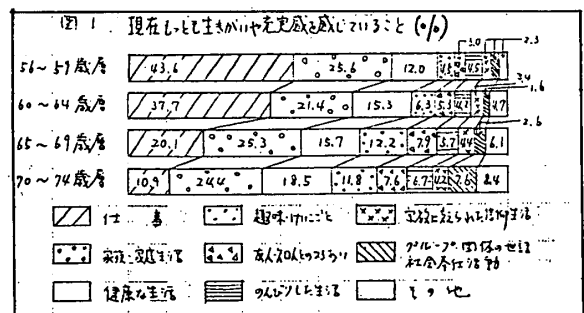
われわれの今回の調査対象者は比較的年齢が高いということもあり、他の調査の結果と比較する場合にはその点も考慮する必要はあるが、全体的に「中」「上」意識が多い集団という特徴があることがわかる。(小島秀夫)

2. 定年退職後の生きがい

「生きがいや充実感がいっぱい」(24%)、「どちらかという生きがいや充実感を感じている」(54%)と、約8割の人がそれなりに生きがいを感じている。これには年齢による変化が余りみられない。平均値で示すと、56~59歳(0.969)、60~64歳(1.004)、65~69歳(1.004)、70~74歳(0.957)である。このことは、定年退職後の生きがいと問題を、人々の

年齢差は余り意味を有しないということであろうか。つまり、高齢者とか老人の生きがいとして一括処理すべきということなのであろうか。結論からすれば、そうすべきではないようだ。生きがい度は変化しなくても、生きがいや充実を感じる対象は、年をとるにつれて変化するからである(図1)。その特徴は、つぎの三点に要約できる。

- (1)年をとるにつれて、生きがいの対象となりにくくなるもの——「仕事」。
- (2)年をとるにつれて、生きがいの対象となりやすくなるもの——「病気をしない健康な生活」「趣味やけいこごと」「友人や知人とのつきあい」など。
- (3)年をとっても変化のみられない生きがいの対象——「家族や家庭生活」。



これらからも分かるように、年をとるということは、生きがいの量よりも質と深い関連があるようだ。

一体、このような生きがいの対象変化は、何に起因するのであろうか。年をとるにつれて人々の健康状態、就業状態、家族の状態、人間関係、自由時間の過ごし方などが変化した結果であろうか。それとも価値観などが変化したからであろうか。ここでは、人々の生活満足度や生活貢献度感の変化を手がかりに、前者の側面を検討したい。

生きがいの対象変化と生活満足度や生活貢献度感の相互関連について、つぎの三点を指摘できる(表3、表4を参照)。

- (1)年をとるにつれて、生きがいの対象とな

りにくくなり、満足度も下降し、貢献度感も減退する代表的なものは、仕事に関連することである。

(2)「家族や家庭生活」は年齢による変化のめられない生きがいの対象であるが、満足度や貢献度感でも同傾向を示すのは、家族でもとくに「妻」の場合である。「妻以外の家族」については、このデータからだけでは、よく分らない。

(3)「趣味やけいこごと」、「友人・知人とのつきあい」などは、生きがいの対象として年齢とともに増加傾向を示したが、それは、「自由時間」や「余暇活動」に対する満足度の増加や、「趣味の会の世話役など」としての貢献度感にみられる増加と対応する。

年齢増加にともなう余暇活動の実態はどうなっているのだろうか。まず、それを行為者率と活動相手の視点から示したのが図2である。それによれば、つぎの四点を指摘できる。

- (1)自分一人で楽しめる活動や妻と一緒に楽しめる活動は、年齢が増加しても行為者率の下降が少くない。
- (2)一人で楽しむ活動には知的なものが多い。
- (3)妻と一緒に楽しむ活動には、土いじりを別とすれば、見物・鑑賞的なものや旅行が多い。
- (4)親しい友人や同じ職場の人と一緒に楽しむ活動は、年齢増加とともに行為者率の下降が著しい。とくに、ゴルフ・麻雀がそれである。

図2. 定年退職後の余暇活動の実態

表3 生活満足度 (平均値)

	I. 55-59歳	II. 60-64歳	III. 65-69歳	IV. 70-74歳
上	C 1.397	C 1.461	C 1.439	C 1.333
	D 1.119	D 1.089	H 1.192	H 1.167
	G 1.010	A 1.084	D 1.187	A 1.130
	A 0.930	E 0.923	A 1.145	D 1.030
	E 0.924	G 0.959	E 1.056	E 0.965
	B 0.812	B 0.858	G 1.048	I 0.861
	H 0.579	H 0.783	B 0.870	G 0.853
	I 0.519	I 0.592	I 0.835	B 0.714
下	F 0.377	F 0.391	F 0.536	F 0.511

- A. 現在の住まい
B. 家族の経済的暮らし
C. 妻との関係
D. 親以外の家族との関係
E. 友人とのつきあい
F. 近所のかかわり
G. 現在の仕事
H. 自由にできる時間
I. 余暇活動
- * 非常に満足(2点), やや満足(1点), どちらでもない(0点), やや不満(-1点), 非常に不満(-2点)として訂正した。

表4 生活貢献度感 (平均値)

	I. 55-59歳	II. 60-64歳	III. 65-69歳	IV. 70-74歳
上	A 1.643	A 1.500	A 1.388	A 1.273
	H 1.159	H 1.139	H 1.092	B 0.840
	I 0.896	B 0.917	B 0.925	H 0.789
	B 0.863	I 0.914	I 0.799	I 0.415
	J 0.330	J 0.139	D 0.153	D 0.008
	C 0.253	D 0.090	J 0.128	J -0.175
	D 0.003	C 0.017	C 0.103	C -0.183
	G -0.526	G -0.232	G -0.230	F -0.388
	F -0.779	F -0.709	F -0.468	G -0.435
下	E -1.212	E -1.207	E -0.943	E -0.609

- A. 妻や子どもの世話(かまそ)として
B. 妻や子どもの相談相手として
C. 孫の遊び相手として
D. 親戚のかまそとして
E. 近所の世話役として
F. 趣味の会などの世話役として
G. 同窓会・校友会などの世話役として
H. 職場内の仕事の責任者として
I. 朝晩先外とのパイプ役として
J. 若い世代の相談相手として
- * 非常に役に立っている(2点), 役に立っている(1点), 役に立っていない(0点), ほとんど役に立っていない(-1点), 役に立っていない(-2点)として訂正した。

活動相手 (活動相手の割合) (おとどけ/おとどけ)	行為者率 (%)					
	~70	69~50	49~30	29~15	14~5	4~
1. 「自分」	×読書 (70→75)	○歌多 (61→52)	○講演会 (61→52)	○習字 (19→10)	○折り紙 (19→10)	○お茶会
2. 「自分+妻」		○土いじり (61→52)	○手芸 (61→52)	○海外旅行 (61→52)	○茶室 (61→52)	○ゴルフ (61→52)
3. 「妻」		○国内旅行 (61→52)	○見物 (61→52)			
4. 「妻+家族」		○ドライブ (61→52)				
5. 「自分+親しい人」	○職場の会 (61→52)					○親戚の会 (61→52)
6. 「自分+仲間や団体の会」						○同窓会 (61→52)
7. 「自分+親しい友人+同じ職場の人」	○飲酒 (61→52)	○麻雀 (61→52)				○ゴルフ (61→52)
8. その他		○水泳 (61→52)	○麻雀 (61→52)	○将棋 (61→52)	○釣道 (61→52)	○ボート (61→52)

以上からすれば、人々の生きがいは、生活満足度や生活貢献度感の変化から明らかにしえるといえる。

3. 定年退職後の余暇活動

定年退職後、年を重ねるにつれ「自由時間」や「余暇活動」に対する満足度は上昇した。生きがいの対象として「趣味やけいこごと」などが増える傾向もみえた。

4. 生きがいを感じている余暇活動

(1)仕事の有無との関連
余暇活動に関して感じられている「生きがい」とか「ほり」は、「生きがい」感一般と必ずしもその意味内容が同一であるとは限ら

ない。余暇活動それ自体が「生きがい」や「はり」の対象となっている場合もあれば、何か別の「生きがい」の対象となるもの（例えば仕事）に密接な関連があるがゆえにその余暇活動に副次的に「生きがい」や「はり」が感じられている場合もあるからである。一般的に言って仕事は生きがいの対象として重要な位置を占めている。したがって、この調査の対象である定年退職者に関しても、現在の仕事の有無に留意しながら「生きがいを感じる余暇活動」の分析をおこなっていくことにする。

まず、「生きがいを感じている余暇活動」それぞれの性格をみるために仕事の有無との関連をみたのが表5である。

表5 はりを感じる余暇活動 X 仕事の有無

活動の種類	仕事の有無		
	全体	有職	無職
ゴルフ	14.2(192)	17.5(157)	8.0(35)
読書	11.1(150)	10.5(94)	12.3(54)
園芸	6.7(90)	4.8(43)	10.5(46)
研究的活動	3.6(48)	3.7(33)	3.4(15)
国内旅行	3.3(45)	3.2(29)	3.6(16)
囲碁など	2.7(36)	2.6(23)	3.0(13)
学習活動(教養)	2.4(33)	2.4(22)	2.5(11)
絵・彫刻など	2.4(33)	2.1(19)	3.0(13)
海外旅行	2.3(31)	2.2(20)	2.3(10)
俳句など	1.8(24)	1.6(14)	2.3(10)
写真	1.8(24)	1.4(13)	2.5(11)
同窓会への出席	1.2(16)	1.6(14)	0.5(2)
麻雀	1.0(14)	1.3(12)	0.5(2)
ドライブ	1.0(13)	1.4(13)	0.0(0)
町内会活動	1.0(13)	0.2(2)	2.3(10)
美術館に行く	0.5(7)	0.8(7)	0.0(0)
NA	21.3(288)	20.7(186)	22.0(97)
計	100.0(1339)	100.0(899)	100.0(440)

これは、44の活動の中から「現在あなたはもっとも生きがいやはりあいを感じているものを1つだけ選択してもらい、それを仕事の有無とクロスさせたものである。この表から、①上位6位までに入る活動の種類は、有職・無職で全く同じである（ゴルフ、読書、土いじり、研究的活動、国内旅行、囲碁など）。すなわち、比較的少数のものに集中している。

②仕事の有無によって比率にかはりの差がみられる活動がある（その代表的なものとしてゴルフ、土いじり（園芸））。①、②をどのように解釈するかは問題をとらえる理論的な枠組によるので、とりあえずここでは①、②の傾向を指摘するにとどめ、以下の分析では上位にある活動と仕事の有無による比率の差が大きい活動に焦点を絞っていくことにする。

(2) 関心をもった時期と影響を与えた人

定年退職者全体の中で上位を占める9種類の活動と関心をもった時期をクロスさせたのが表6である。また、上位9種類の活動と影響を与えた人をクロスさせたのが表7である。

表6 生きがいを感じている余暇活動に関心をもった時期

生きがいを感じる余暇活動	関心をもった時期									計(人数)
	1 小学生時代	2 中学生時代	3 高等学校時代	4 大学(学部)	5 専修学校(3年制)	6 専修学校(4年制)	7 職(定年退職前)	8 専(定年退職)	9 その他	
1. ゴルフ	-	-	0.5	2.6	36.5	42.6	9.0	3.7	-	189
2. 読書	22.9	27.8	21.5	2.9	2.1	5.6	6.9	8.3	2.1	144
3. 土いじり	8.0	13.8	2.3	1.1	11.5	24.1	16.1	20.7	2.3	87
4. 研究的活動	4.4	6.7	6.7	2.2	13.3	26.7	15.6	24.4	-	45
5. 国内旅行	2.3	4.7	7.0	2.3	7.0	9.3	32.6	34.7	-	43
6. 囲碁・将棋など	14.3	11.4	11.4	22.9	14.3	11.4	8.6	5.7	-	35
7. 絵など	6.3	15.6	9.3	-	9.4	12.5	12.5	25.0	9.4	32
8. 学習活動	-	13.3	30.0	10.0	6.7	10.0	13.3	13.3	3.1	30
9. 海外旅行	3.4	6.9	10.3	-	6.9	10.3	13.8	44.8	3.4	29
10. その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	430

表7 生きがいを感じている余暇活動に関心をもったきっかけ

生きがいを感じる余暇活動	関心をもったきっかけ						計(人数)	%
	とくに親や友人	相対的に多い	学校時代の先生や友人	仕事関係の人	地域の団体やサークル	マスコミ・書籍		
1. ゴルフ	3.2	1.1	-	93.2	1.1	-	1.6	189
2. 読書	39.5	13.6	28.6	5.4	-	6.8	6.1	144
3. 土いじり	33.0	42.0	2.3	5.7	1.1	9.1	6.8	87
4. 研究的活動	39.3	8.5	19.1	14.9	2.1	4.3	12.8	45
5. 国内旅行	29.5	22.7	4.5	13.6	-	25.0	4.5	43
6. 囲碁・将棋	8.8	32.4	5.9	41.2	-	-	11.8	35
7. 絵など	21.2	9.1	12.1	18.2	12.1	3.0	24.2	32
8. 学習活動	30.3	9.1	18.2	9.1	-	27.3	6.1	30
9. 海外旅行	32.3	29.0	-	16.1	-	14.4	3.2	29
10. その他	-	-	-	-	-	-	-	430

この二つの表から、ゴルフは他の活動とは性格が全く異なるものであることがわかる。40(1)での結果と考えあわせれば「ゴルフは仕事をしている人が仕事上のつきあいや仕事関係の人と一緒にする余暇活動」といった通念に合致することがわかる。読書は学生だった時代にいつのまにか身につけた習慣といった色彩が濃く、主いじり(園芸)は、中年以降に家族の者の影響など身近な人の影響を受けていつのまにか始めるようになり、退職後に特に無職で時間の自由な人がかなりのエネルギーを注いでやる活動といったイメージが浮かび上がってくる。その他、学校時代の影響に着目するわれわれの調査の視点からすると、学生時代に家族や学校で接する人からの影響で関心を抱き、それが定年退職後の生活において生きがいを感じさせている活動(読書、研究的活動、絵、学習活動(教養のため)、写真、音楽会、楽器演奏など)が注目される。一方で、その反対の意味で、学生時代に接することなく社会人になってから仕事との関連もあって始めた活動(ゴルフなど)も注目に値する。

5. 学校時代の体験と生きがい

学校時代の体験が現在の生活に對してもっている意義を検討するために、われわれはまず、学校時代にもったと考えられるさまざまな体験に関する質問を19個用意し、それぞれについて体験の有無をたずねた。それらを因子分析にかけて3つの因子にまとめたのが表8である。それぞれの因子に関連している質問項目に共通する特性に関しては、充分な検討が必要だが、とりあえず第1因子を「学校内でのことばらに關係する因子」、第2因子を「友人關係・人間關係に關係する因子」、第3因子を「家庭に關係する因子」と呼んでおく。

「生きがい」を感じているか否かと、学校

時代の体験に関する因子分析の結果得られたカテゴリーとをクロスさせたのが表9である。これで見ると、全般的な傾向として現在の生活の中での「生きがい」感の有無と学校時代の体験のタイプとの関連はそれほど明確ではない。強いて言えば、学校時代の体験に関する質問のそれぞれに「体験あり」と答えていた人に「生きがい」を感じている人の割合が高く、「体験なし」と答えた人の中に「生きがい」を感じていない人の割合が相対的に高くなっている。しかし、この傾向については、今後なお分析を深めていく必要がある(なお、「生きがい」を感じていると答えた回答者は8割以上、感じていないと答えた人は5%以下である)。発表においては以上の点のほか、①「生きがい」を感じている人の中でもさらに、それを強く感じているか、まあ感じているか、を分けた分析、②「生きがい」を感じている対象と学校時代の体験との関連についての分析、③「生きがい」感をもっている人の役割認知(2の「生活貢献度感」との関連についての分析、について報告する予定である。なお、当日の発表では触れなかったが、「生きがい」を感じていないと答えたごく少数の人たちについては別箇に分析する必要があるだろう。②に関するデータの一部分を表10に示しておく。データの検討は当日の発表の際におこなう。(社永雄一)

表8 学校時代の体験項目(因子分析結果)

因子	質問項目(因子負荷量)	重複している
ネ 1 因子	● 学校で先生からほめられたり、いろいろなことを頼まれたりして、信頼されていると感じたこと (0.79610)	*
	● 級友から信頼されていると感じたこと (0.70507)	
	● 勉強の成果について深い満足感を味わったこと (0.67739)	
	● 学校の授業が楽しいと感じたこと (0.66864)	
	● 級長になったこと (0.63250)	
	● 疑問を解いたりして、先生からほめられたこと (0.60550)	
	● 自分に課せられた役割や責任を果たしたという満足感を味わったこと (0.51375)	
	● 友だちや後輩のめんどろをみたり相談のつたりしたこと (0.43887)	
	● 絵・習字・作文などでほめられたり、賞をもらったりして喜びを感じたこと (0.45800)	
	● スポーツで良い記録を出したり、入賞して喜びを感じたこと (0.62130)	
● 友人などに勉強以外のことで自慢できる特技なり長所を持っていると感じたこと (0.59496)		
● 級友や先輩と一緒にあって、何かをなしたとげたという満足を感じたこと (0.58828)		
● 友だちや後輩のめんどろをみたり相談のつたりしたこと (0.47378)		
● 時間のたつのを忘れて野外で遊んだこと (0.40032)		
● 自分に課せられた役割や責任を果たしたという満足感を味わったこと (0.40300)	*	
● クラブなどのリーダーになったこと (0.60008)	*	
ネ 3 因子	● 兄弟のめんどろをみるなど家の手伝いをして非常に役立ったこと (0.46524)	*
	● 仕事をして家の経済を助けたり自分の学費をかせいだこと (0.41348)	

表9 学校時代の体験のタイプと生ごがいの因子

学校時代の体験のタイプ	ネ1因子	ネ2因子	ネ3因子	ネ4因子	ネ5因子	ネ6因子	ネ7因子	ネ8因子	ネ9因子	ネ10因子	ネ11因子	ネ12因子	ネ13因子	ネ14因子	ネ15因子
生ごがいのタイプ	12.4 (25)	8.9	12.0	10.9	11.2	12.4	10.9	21.3	100.0 (258)						
とびきりなタイプ	16.5	11.0	13.3	7.8	14.4	11.4	11.5	14.0	100.0 (513)						
とびきりなタイプ	27.1	10.6	12.9	8.2	8.8	12.9	10.6	8.8	100.0 (170)						
とびきりなタイプ	30.6	16.7	22.2	—	13.9	8.3	2.8	5.6	100.0 (36)						
ほとんどのタイプ	14.3	27.6	14.3	14.3	14.3	14.3	—	—	100.0 (7)						

(123) (111) (137) (87) (131) (122) (112) (151) (N=1034)

欠補位 318人

ネ1因子: 学校に属したことから
ネ2因子: 交友関係に属した因子
ネ3因子: 家族・家庭生活上の因子

表10 学校時代の体験のタイプと生ごがいの対象所在

学校時代の体験のタイプ	ネ1因子	ネ2因子	ネ3因子	ネ4因子	ネ5因子	ネ6因子	ネ7因子	ネ8因子	ネ9因子	ネ10因子	ネ11因子	ネ12因子	ネ13因子	ネ14因子	ネ15因子
家族や家庭生活	17.8 (22)	9.6	14.7	9.6	13.7	10.2	9.6	14.7	100.0 (197)						
仲間生活	18.5	22.2	11.1	—	18.5	3.7	—	25.9	100.0 (27)						
団体や部活生活	20.0	5.0	10.0	10.0	5.0	25.0	5.0	20.0	100.0 (20)						
知人・友人との付き合い	13.0	10.9	14.6	10.9	8.7	8.7	10.9	17.4	100.0 (46)						
仕事	11.5	8.0	14.1	9.5	14.5	13.0	13.4	16.0	100.0 (262)						
趣味やレジャー	20.0	15.4	3.1	6.2	13.8	15.4	7.7	18.5	100.0 (65)						
お金のやりとり	19.5	7.3	14.6	4.9	12.2	7.3	19.5	14.6	100.0 (41)						
健康な生活	12.6	14.2	11.0	10.2	11.8	13.4	13.4	13.4	100.0 (27)						
その他	22.9	5.7	11.4	5.7	14.3	5.7	8.6	25.7	100.0 (35)						

(125) (95) (106) (72) (109) (96) (93) (134) (N=820)

ネ1因子、ネ2因子、ネ3因子は表9に同じ